

沖縄の民話記録をどう活用するか

沖縄伝承話資料センター会員・専修大学名誉教授 樋口淳

1. はじめに：民話はどうのように語られ、記録されてきたか

1-1. はじまりとしてのペロー

民話は、世界のどこかで、いつか誰かが語りはじめ、聞き手が語り伝えてきたのだから、世界中に存在し、その記録はさまざまで、記録の起点は、どのようにも定めることができる。

日本には「古事記」「日本書紀」「風土記」などの身近な語りとその記録があるが、私の場合は、私的な研究の都合上、フランスのシャルル・ペローを出発点として考えることが多い。

シャルル・ペロー（1627-1703）はヴェルサイユの宮廷人で、一六九七年までに公表したわずか十一話の民話を残したにすぎないが、「シンデレラ」「赤ずきん」「長靴をはいた猫」「眠れる森の美女」「青ひげ」など現在ではだれもが知っている話は、もし彼が記録し再話して昔話集におさめなければ、誰も知らない＜忘れられた話＞になっていたであろう。

とはいえ、民話の研究ということになれば、ペローの『昔話集』から百年以上たった一八一二年のグリム兄弟の『子どもと家庭のためのメルヘン・初版』が起点となると言ってよい。その後、グリム兄弟の集めた話は話数も二百余りとなり、語り手とその暮らしに関する情報を知るのに都合がいいサイズに落ち着いた。そして、とくに弟のウィルヘルムの努力のおかげで、ドイツの片田舎に伝承される民話がヨーロッパ各地から、インドを経て、世界中にネットワークを有すると考えられるようになるための、格好のヒントとなった。

1-2. グリムからアアルネへ

グリムのおかげで民話の世界的な広がり気がついた人たちは、民話の収集と研究に夢中になり、十九世紀の末にはイギリスを中心に優れた民話研究と民話集が数多く生まれた。

そして20世紀に入るとフィンランドのアンチ・アアルネによって＜話型＞というアイデアが生まれ、民話は動物民話・本格民話・笑話という三つのジャンルに整理され、やがて番号が付けられてとりあえず二千のタイプに収められ、やがてトンプソンによって、＜形式譚＞と＜その他の話＞というジャンルが加えられて二千五百のタイプに落ち着いた。

この話型というアイデアが便利なのは、たとえば「シンデレラ」なら五一〇という話型番号を振り当てて小さな引き出しを作り、世界中のシンデレラ話をその引き出しの中に放り込んでおくと、五一〇番の引き出しを開くだけで世界中のシンデレラの分布と比較が可能になることである。（もちろん、実際の作業はそれほど簡単ではないが、とにかく便利であることは間違いがない）。

以上の話は、民話研究者なら誰でも知っていることだが、この民話の記録と研究の世界的な歩みは、沖縄の民話の記録と研究の歩みそのものであると言える。

2. 沖縄の民話はどうのように語られ、記録されてきたか

2-1. 文字と文献による記録

沖縄における民話記録は、古代の「古事記」や「日本書紀」と同じく、琉球国の建国神話や口承物語をおさめた歌謡集の『おもろさうし』(1531)、『中山世鑑』(1650)、『中山世譜』(1743)『球陽』(1743)のような歴史書、そして特に『遺老説伝』(1743)に多く見られるが、グリムの場合のように民話に特化し学術的な研究の起点となるのは、佐喜眞興英の『南島説話(百話)』(1922)であるに違いない。佐喜眞は各話に短い解説をつけ話者や話者の出身地を明かにしている点で、彼の『南島説話』はグリム兄弟やその後の研究者の業績に匹敵する。

『南島説話』より数年遅れて出版された島袋源七の『山原の土俗』(1929)も貴重な民俗記録で、「琉球小話」として二七話の民話を記録している。佐喜眞や島袋が活躍した時代には、柳田國男、折口信夫、伊波普猷等が民俗の研究・調査を行い、多くの成果を生んだが、沖縄の民話記録としては佐喜眞、島袋の業績に並ぶものは見当たらない。

2-2. 音声による語りの記録

遠藤庄治が「沖縄民話調査の課題(1977)」で指摘しているように、佐喜眞興英の『南島説話』以降「民話そのものを目的にして、その伝承を記録保存する本格的な調査はまったくなされなかった」。

その流れを変え、沖縄の民話調査の質と量を一挙に高めたのは、一九七三年の立命館大学(福田晃)、大谷女子大学(岩瀬博)、沖縄国際大学(遠藤庄治)による三大学合同調査であり、この調査団は一九七三年に与勝諸島、七四年に国頭村、大宜味村、東村、七五年・七六年に八重山諸島、宮古と伊良部を訪れている。さらに七七年には福田晃と岩瀬博が<奄美沖縄民間文芸研究会・宮古民話の会合同調査>を組織し、宮古郡城辺町、上野村・下地町の調査を行った。これらの合同調査の成果は福田晃・岩瀬博・遠藤庄治編『沖縄の民話』(日本放送出版協会・1980)として刊行され、巻末には詳しい調査記録が付されている。

遠藤庄治は、その間三大学合同調査と並行して、一九七三年に沖縄国際大学に学生たちとともに<口承文芸研究会(口承研)>を立ち上げ、三大学調査の対象地域の予備調査・補足調査を行うとともに、那覇市、恩納村、伊良部村、などで独自の調査を行い、本部、読谷、那覇などの調査対象地域で協力者を募り、「本部民話の会」「糸満民話の会」「読谷ゆうがおの会」などの地域<民話の会>を組織し、地元の人たちによる調査の継続と恒常化を促した。

そして一九七六年四月には、各地の民話の会を統合する「沖縄民話の会」を設立するに至る。この間の遠藤庄治の働きは瞠目に値する。今日、沖縄伝承話資料センターが管轄する七万六千件を超える民話データの基礎は、この時に生まれたと言ってよい。しかし、当初は民話の音声記録の特性と利点を十分に理解している者はいなかった。

2-3. 民話記録の転回点としての音声記録

2-3-1. 調査の目的・成果とその活用

一九七〇年代における民話調査、特に三大学合同調査のような組織的な調査の主な目的は、①調査対象地域の話者を短時間のうちにできるだけ多く動員し、当該地域に分布する民話の特徴を把握すること、②予備調査と初期の調査で見出された優れた話者を繰り返し

訪れ、その〈よい語り〉を聞き出し、文字に起こして（翻字して）記録し、③よい語り手のよい語りを集めて〈民話集〉を編集・出版することである。

もちろん、ここで〈よい語り手〉〈よい語り〉とは何かという大きな問題が残るが、それは一時おくとして、三大学合同調査はその成果を前述の『沖縄の民話』として日本放送出版協会から刊行し、遠藤庄治と口承研や地域民話の会の調査者は地域自治体の支援を受けながら読谷村、恩納村、本部町、石川市等の地域の語りを次々と刊行していった。この業績は、今後の沖縄民話研究の基礎となることは間違いない。

遠藤は、一九七九年に「沖縄から日本の民話を考える」を執筆し、その時点で調査実績が一万話を越えたことを踏まえて、沖縄民話の伝承圏を①沖縄本島圏、②宮古圏、③八重山圏の三つに分け、それぞれの圏域に伝わる動物昔話、本格昔話、笑話、伝説などを具体的に上げながら、各圏域の伝承の特色と研究課題を述べている。

遠藤は、三伝承圏の地理・歴史的な違いが生みだした民俗文化の差異を、具体的な話を通して目に見える形で提示し、その上で伝承圏の差異を越えて共有される〈沖縄民話〉として特性を抽出し、沖縄を取りまく日本本土・中国・韓国などの民話や、おそらくは民族的なルーツを共有する東南アジアの民話との国際比較を行っている。

これは、グリムに始まり、アアルネ・トンプソンの話型比較を経て、柳田國男の「名彙」、関敬吾の「集成」に至る民話研究の在り方を踏襲し、沖縄民話の立ち位置を明らかにした見事な成果であると言える。

しかしながら、この時点での遠藤の調査とその方法は、今日の私たちの視点から見れば、いくつかの問題が残されている。もちろんその多くは、時代的な制約から生まれたもので、問題の指摘はいわゆる〈ないものねだり〉に過ぎないが、現在の私たちが遠藤の成し遂げた成果を踏まえて、その活用を考える上では看過できない反省点であるに違いない。

2-3-2. 二十世紀の沖縄調査の制約と問題点

遠藤は、「沖縄民話調査の課題」の中で、沖縄（琉球弧）の広がりについて述べた後に、次の4つの問題点を指摘している。

まず第一は、〈民話圏の小ささ〉である。沖縄の場合は、たとえ人口百人の島であっても〈他の地域にはない話型を伝承している可能性〉がある。これは実は、世界中のどこの地域に関しても言えることなのだが、離島の多い沖縄ではこの違いが際立っている。

第二は、〈過疎による伝承基盤の崩壊〉の問題である。この時期の沖縄では、離島を中心に急速な過疎化が進行していた。これも実は、日本本土をはじめ世界中に共通する問題だが、やはり離島を抱えた沖縄ではことに深刻である。

第三は、沖縄戦による伝承者の喪失である。とくに沖縄本島中南部では多くの伝承者（とくに男性）の命が失われた。民話の伝承においては、一人の伝承者の喪失が地域の語りの伝承の形を変えることもある。沖縄の場合は、沖縄戦という人為的な悲劇によって多くの伝承者とその伝承が失われた可能性が高い。

第四は、〈世代による伝承の断絶〉である。沖縄の方言は「日本のどの方言よりも共通語と大きく隔たっている」と指摘し、国家や自治体が学校教育を共通語化し、方言を使用することを処罰の対象にまでしたので、方言で語り継がれてきた民話は、語りの言葉を失い、世代間のギャップが民話の伝承を妨げることとなった。

この世代間の断絶は、実は方言の喪失のみに起因するものではなく、家族や地域共同体の暮らしの変化に起因することが多いが、沖縄では、方言の喪失による断絶が特に著しかった。

以上四つの指摘には遠藤の語りと語りの言葉を守ろうとする姿勢が強く表れている。しかし、皮肉なことに、彼はその数行前に「沖縄の民話調査は＜方言の壁＞との戦いである」と述べているのである。

「民話を伝える老人の方言は、同じ方言圏の沖縄本島でさえ字ごとに違い、それを調査する学生の大半は、一応聞くことは出来ても正確に話すことは出来ないのである。したがって、採集時には、地元出身者の協力を得なければ採集した話を理解することが出来ないこともある」という。

このことは、特に＜短い限られた時間のうちにできるだけ多くの語り手の語りに触れ、しかもよい語り手に出会い、よい語りを出来るだけ多く記録する＞という組織的な調査にとってはまさに＜壁＞である。方言によってしか伝えることのできない地域の伝承の調査が、その方言によって妨げられるというのは、いかにも逆説的なことだ。

しかしこの逆説も、実は民俗学や人類学・民族学の調査には当初から不可避のことであり、マリノフスキー、モース、レヴィストロース、山口昌男のような優れた研究者は、その逆説をむしろ梃にして成果を築いてきた。

三大学合同調査、沖縄国際大学口承研、地域民話の会の調査も、まさにこの＜壁＞を乗り越えて大きな成果を挙げたが、その努力を可能にしたのは学生と地域の人々の献身と、テープレコーダという新しい機材の威力である。

私の知る一九八〇年代の遠藤の調査では、多くの場合、調査者は幾つかの班に分かれて公民館や話者の自宅を訪ね、語りをテープに記録する。(当該調査にあたっては、予備調査や前回の調査、隣接地域における調査などの情報が、あらかじめ調査者に共有されている。)

そして、一日の聞き取り調査が終わると、調査者は宿舎にもどり、テープを聞きなおし、指定されたカードに整理し、夕食後に報告会を行い、調査者全員が調査地域における新しい伝承事情を共有し、報告会後もなおテープやカードの整理を深夜まで継続し、翌日の調査が始まる。

こうした組織的な調査において、テープレコーダに収められた語りの音声記録が果たした役割がいかにか大きかったかは想像に難くない。

三大学合同に始まる音声記録をともなう調査では、カラオケのような大きなマイクを話者に向けて「これから**さんの＜**＞という話を聞きます。聞き手は**調査何班の**です、それでは**さん先ほどの話を方言で語ってください」「つぎに同じ話を共通語でお願いします」というスタイルで記録が行われ、一話ごとに方言語りと共通語語りが整理されることが多かったので、後にこれをデジタル化してエクセルに整理し、データベース化するには大変便利だったが、民話の録音を優先したために、今となっては貴重な地域の暮らし(民俗)に関する情報の多くが切り捨てられた。

また、一九七九年にソニーのウォークマンが発売されてカセットテープが普及するまでは、録音機材もテープも高価であったので、テープによる民話の録音は文字データ記録の補助と考えられ、語りが文字化されるとテープは初期化されて、次回の調査に再利用されることも多かった。録音時間も節約されて、語りの録音も最小限にとどめられた。

この時期の記録を保存し、今日まで利用可能にした福田晃、岩瀬博、遠藤庄治等の決断と、各地域の自治体の支援は類例の少ない貴重なものだが、民話記録を優先するあまり、貴重な民俗情報が犠牲にされた可能性は否めない。

2-3-3. 二十一世紀の民話記録とコンピュータとエクセルによるデータベース化

二十世紀における民話音声記録の利用は、一九八〇年代後半から研究と記録にワードプロセッサ（ワープロ）が導入され、デジタル化が進行すると徐々に変化をとげてゆくが、二十一世紀に入りワープロが姿を消し、コンピュータが主流になると一挙に多様化が進行する。

日本民話データベース作成委員会が、「日本民話データベース」というプロジェクトを日本学術振興会に申請し、助成を得たのが二〇〇一年四月であったことは、民話記録の利用の一つの転換点を示すものである。

「日本民話データベース」というプロジェクトは、当初からこの転機に気づいていたわけではない。プロジェクトは、当初、二十世紀末までに蓄積された日本各地の民話記録のデジタル化による保存を目的としていた。従来の民話記録は、テープレコーダによるアナログ記録であり、時間とともに失われることが明らかであったので、これをコンピュータのソフトを利用してデジタル化し、劣化を防ぎ、永く保存することを主な目的としていた。

事実、一九七〇年代以降の日本各地の民話記録は、三大学合同調査等を始めとする組織的な取り組みによって広がりを見せていた。日本各地の大学をはじめとする学術機関や個人による民話調査も進行し、記録の蓄積は短期間で世界に類例がないレベルに達した。

とくに遠藤庄治の率いる沖縄、立石憲利の岡山、酒井董美の島根・鳥取、小野和子の宮城、水沢謙一による新潟、武田正による山形、佐々木達治の津軽等の調査は群を抜いていた。

「日本民話データベース」は、これらの優れた調査者に呼びかけ、アナログテープを借り受け、デジタル化してCD-ROMに整理した上で、CD-ROMとともにアナログテープを返却する作業を行ったが、当初はコンピュータのキャパシティが低く、作業は難航した。しかしながら、コンピュータの性能は時とともに幾何級数的に進化し、その結果、デジタルデータのエクセルによる整理とファイルメーカーを利用した本格的なデータベースの作成が可能になった。

2-3-4. 民話記録のデータベース化のメリット

二十世紀に蓄積されたアナログデータをデジタル化し、さらにエクセルを利用して整理し、データベース化することで、民話記録の多角的な活用がはじまった。

このデータベース化とその活用のメリットを挙げると、①民話研究の拡大と進化、②社会言語学・方言学研究に対する貢献、③民話研究と民俗学・社会学研究の融合、④学校教育・図書館・博物館・資料館・公民館などへの情報提供、⑤地域文化遺産の活用と観光民俗学・人類学への貢献など、ほぼ無数にあると言える。

これらのメリットは、もともと民話記録に内在していたものだが、コンピュータとインターネット・ネットワークの発信力によって初めて実現されたものが多く、一般に二十世紀末までは予測不可能なものばかりであった。

3. 沖縄民話データベースの活用

3-1. 民話調査記録と研究の拡大と進化

まず第一に指摘したいのは、蓄積された民話調査記録利用の進化である。

現在、沖縄伝承話データベースと東アジア民話データベースがデジタル化し、利用が可能になった資料は、沖縄で四五〇〇〇件、沖縄・日本本土・韓国・中国で六七〇〇〇件を超え、エクセルとファイルメーカーによってデータベース化され、六十四ギガの小さなUSBに収まっている。

また、沖縄県立博物館提供するホームページ「うちなー民話の部屋」の〈民話データベース検索〉にアクセスすれば、沖縄伝承話資料センターが寄贈した三三〇〇〇件のデータは、誰でも簡単に資料の閲覧が可能であり、粟国村のホームページ「粟国アーカイブス」のサイトでは粟国の民話の語りと歴史・民俗などの文化情報に触れることができる。また二〇二二年四月に公開された「読谷村史編集室ホームページ」の〈読谷村しまくとぅば・むんがたい〉のページからは読谷村の二十二地域の語りを聞くことができる。

これらのデータベースやホームページの公開によって、沖縄民話資料の利用可能性は格段に拡大したはずである。たとえば、沖縄の「天人女房」や「蛇婿入り（あかまた婿入り）」と日本や東アジアの比較研究を行おうとする場合、従来のアナログデータに依存する場合には、宜野湾市の沖縄伝承話資料センターか、おもろまの県立博物館を訪れて、アナログテープとカードを検索するよりほかに手段がなかったため、膨大な時間が必要とされた。

こうした比較研究は、もちろん『日本昔話通観』などの既存の資料集を利用することで手続きの簡略化をはかることも可能であるが、典型話とそれに付随する話の要約だけでは、それぞれの語りが包摂する細やかな民俗や、地域や語り手の個性などに踏み込むことができない。民話の語りの片言隻句に潜む小さな指標を見落とす可能性が高い。

これに対して、データベースを利用すれば、日本だけではなく世界中のどこからでも、いつでも都合のよい時間に沖縄県立博物館、沖縄伝承話資料センター、粟国アーカイブス、読谷村史編集室、名護博物館などにアクセスして資料研究を行うことができるだけでなく、収録された語りの隅々まで踏査することが可能になる。研究者は、これまでの調査の具体的な成果を、自らの知見と重ね合わせて、自らの力量に応じて、独自の視点を紡ぐことができるだろう。

3-2. 社会言語学・方言学研究に対する貢献

沖縄伝承話資料センターが現在名護市立博物館と協力してデジタル化を目指す合計七万六千六十三件（うち五万八千七百二十五件はデジタル化完了）の調査記録に、手つかずの糸満、佐敷、豊見城等の調査記録を加えたおそらく八万件を超える語りのデータは、民話のみならず調査地域の言語や民俗の記録として貴重である。

とくに言語に関しては、当初から調査目的をく地域共同体の言語（方言）による語りの記録を第一とし、共通語記録を方言記録の補助手段としていたことから、地域言語の貴重な資料となっている。

つとに遠藤庄治が「沖縄民話調査の課題（1977）」で指摘しているように、三大学合同調査が行われた一九七〇年代初頭においても、民話伝承の言葉である方言は失われつつあった。しかし、家庭内や地域共同体内ではなお日常生活の言語として方言が語ることが多かった一九七〇年代に始まる二十世紀の沖縄全域の語りの調査は、今日では調査不可能な方言の音声記録を数多く留めている。

言うまでもなく、民話調査と方言調査では目的も手法も大きく異なり、しかも民話調査は録音環境が悪く、雑音も多く、話者の発言が聞き取りにくいこともしばしばである。しかし、今日のコンピュータの音声クリーニング技術を駆使すれば、民話調査の音声資料の音質を方言調査に必要なレベルに高め、確保することも難しくない。問題は、方言学や社会言語学と民話・民俗学研究との間に存在する縄張り意識や不信感、そして専門研究者が抱きがちな優越意識を取り除くことであり、相互の協力関係を築くことである。

3-3. 民話学と民俗学と社会学

ここで少し遡って、さきほどのくよい語り手>とくよい語り>について考えてみよう。

つきつめて言えば、民話の語り手は、だれでもくよい語り手>でありくよい語り>を語る。語りには、どのような片言隻句であっても、語り手の世界が込められているのである。

たとえば柳田國男と佐々木喜善の出会いと『遠野物語』の関係を考えてみればよい。

柳田は、喜善の語りのなかから遠野という世界と、そこに生きる人たちの世界観を見事に引き出している。『遠野物語』は、民話集であるが、同時に民俗学研究であり、社会学研究である。

遠藤庄治もまた、大城蒲太、佐和田カニ、山本川恒、国吉瑞枝のような優れた語り手と出会い、その世界に深く分け入っている。

私自身の乏しい経験に即して語れば、大宜味村謝名城の根神・大城茂子さんとの出会いは貴重だった。茂子さんに案内されて謝名城の御嶽や拝所や神道^{かみみち}をまわって要所要所でウミイを聞き、神祀りのあり方や、祝女を初めとする神組織について聞いた。峠や川筋や海辺を歩きながら、出没する怪異やタマガイの話聞いた。婚姻や食生活や建築儀礼など、なんでも尋ね、なんでも教えてもらった。調査はほんの数回にすぎず、合わせて二週間程度の短い期間だったが、私の沖縄民話・民俗・社会に対する理解の基礎となった。

民話の語り手は、語り手と聞き手の間に成立する一度限りのパフォーマンスであり、音声の記録には、そのパフォーマンスの現場性（アウラ・Aura）が欠けるが、その記録に注意深く耳を傾け、その背景を補う努力を惜しまなければ、語り手と語りの世界が見えてくるはずである。

3-4. 博物館・資料館・公民館・図書館・学校教育などへの貢献

二十一世紀に入り、博物館・資料館・公民館・図書館などの公共施設や、学校教育の在り方が変わりつつある。博物館・資料館・公民館・図書館は、従来のアナログ資料の維持

管理や展示という施設（箱もの）依存型の＜時と所に支配された＞情報提供にとどまらず、インターネットやSNSを利用して情報発信を行い、いつでもどこでも、誰にでも施設の管理する情報を提供するデジタル・サービスを展開することができる。

たとえば、すでに地域の図書館・公民館では、IDとパスワードの登録によって、施設の所有する電子ブックや電子情報の自由な閲覧が可能とされるサービスが始まっている。視覚障害の読者には音声による情報提供も可能である。

こうしたサービスは、展示スペースに限りのある博物館・資料館では、今後必須のものとなるだろう。特に、これまで展示の難しかった民話のような音声資料や、琉球舞踊のような伝統芸能の情報提供に、デジタルが威力を発揮するはずである。沖縄県立博物館の「うちな一民話のへや」や栗国村の「栗国アーカイブス」や読谷村の「読谷村史編集室ホームページ」は、公共機関によるデジタル情報公開の好例である。

こうしたデジタルによる資料提供は、学校教育の現場にもさまざまな影響を与えることになるだろう。とくに沖縄各地の学校では、公開された音声資料を使用して地域の語りを聞き、地域の言葉や文化・歴史について学ぶことが容易になる。記録された話をもとに、フィールド・ワークを行ったり、紙芝居やアニメ制作を試みるようなアクティヴ・ラーニングも可能になる。

また、沖縄以外の地域の（海外を含む）学校現場でも、従来とは違った形で沖縄の言語文化に触れる可能性が広がる。文字だけではなく、音声とともに沖縄の言葉・歴史・文化に触れることで、より具体的な文化理解と文化の継承が可能になる。

3-5. 地域文化遺産の活用と観光民俗学・人類学への貢献

東西大東島を除いた沖縄全域の約八万件の語りの記録は、世界的にみても他に追随を許さない、稀な無形文化遺産である。この成果は、すでに述べたように地域に還元され、博物館、資料館、公民館、図書館などを通じて、地域社会の文化情報を発信し、学校教育などに貢献されてしかるべきだが、同時に地域を訪れようとする人たち、また実際に訪れる人（観光客）たちにく観光情報＞を与え、訪れる地域の文化理解を深める役割を果たすことができる。

こうした試みは、近年＜観光学＞あるいは＜観光人類学・民俗学＞として研究の対象となりつつあるが、沖縄の民俗学を活性化する大切な領域である。

栗国村の「栗国アーカイブス」と読谷村の「読谷村史編集室ホームページ」は、その具体的な成果である。

沖縄伝承話資料センターは、現在、これまで沖縄県立博物館、名護市、栗国村、読谷村とデータベース作成の技術と情報を共有してきたが、今後、沖縄全域の自治体、教育機関、博物館、資料館、公民館、図書館などと協力し、情報のネットワークを構築する用意がある。

資料と情報の共有とネットワーク化は、情報発信の規格と企画の統一を意味するように思われがちだが、県立博物館の「うちな一民話のへや」、栗国村の「栗国アーカイブス」、読谷村の「読谷村史編集室ホームページ」、沖縄伝承話資料センターやデータベース作成委員会のホームページ等をみれば分るとおり、それぞれが独自の手法を用いて個性的な情報

発信を行うことが基本となる。それぞれの自治体や施設や組織によって情報発信の目的も条件も異なるのだから、その手法は多様で、異なったものになるのが当然である。

次に、栗国村の「栗国アーカイブス」と読谷村の「読谷村史編集室ホームページ」を紹介しながら、デジタルによる民話・民俗を核とした情報発信の現状と可能性について管見してみよう。

4. 栗国村の民話・民俗情報発信

4-1. 栗国アーカイブス

栗国アーカイブスは、二〇一三年から一五年までの一括交付金を利用して栗国村が立ち上げたサイトで、図1に示された、①遺跡、②歴史・民話、③民俗・文化、④年中行事、⑤自然、⑥生物、⑦産業、⑧しまくとぅば、⑨新聞(掲載ニュース)、⑩その他という十種類のアイコンから、栗国島(栗国村)の文化情報にアクセスすることができる。

例えば「歴史・民話」のアイコンをクリックすると、「歴史・民話」七二五件の情報のうち五六二話の民話が検索できる。さらに検索のタグから「与那全福さん」の「栗国兼浜」を選べば、与那さんの語りを聞くことができる(図2・3)。音声記録の数は限られているが、音声のない場合は梗概が記されているので、話の概要を知ることができる。

さらにトップページ下部の「民話を読む」「動画を見る」という二つのアイコンから、栗国村が刊行した『栗国島の民話(1992)』と『栗国村史(1984)』の電子書籍をダウンロードできるし、しまくとぅばと共通語の語りのアニメの動画を見ることもできる(図4)。

沖縄本島の北西約60キロメートルに位置する人口650人ほどの離島の村が、一括交付金という限られた財源を用いて、民話・民俗という無形の文化遺産を目に見えるかたちで発信したことは快挙であり、一九七〇年代に始められた民話調査研究の成果を目に見えるかたちで示している。

4-2. 遠藤庄治と沖縄国際大学口承研の栗国調査



栗国アーカイブに公開されている五六二話の語りは、『栗国島の民話』の解説で遠藤庄治が述べているように、沖縄国際大学口承文芸研究会（口承研）、遠藤のゼミ生、沖縄民話の会会員を中心に行われた四回の合宿調査（1980-88）と一九九〇年に遠藤が単独で行った補足調査によって記録された七〇四話のうちから選定されたものである。

この調査は、栗国村出身で当時遠藤のゼミの一員であった島元八重子（旧姓・伊良皆）の卒論計画から始まった。彼女の計画を知った遠藤がただちに調査チームを組織し、一九八〇年八月に六日間にわたる調査を実施し、三八六話を記録した。この時の遠藤の行動力と組織力には目を見張るが、遠藤と島元の要請に応じてのべ九十六人の語り手を募り、調査を支援した栗国村当局と村人たちの素早い対応にも驚かされる。島元は、一九八〇年と一九八一年の二度にわたる調査の成果をもとに論文仕上げ、その後の調査にも同行し、『栗国島の民話』の編集に携わった。

遠藤が「解説」で述べているとおり『栗国島の民話』は、「戦後の日本の民話集の中でも、一つの村、一つの離島の民話集としては、他の追従を許さない優れた民話集」と言える。遠藤は、この民話集の特色を、①本格昔話の話し型・話数が多く、②笑い話など歴史の浅い話が少ない。③伝説の話し型が豊富で、語りが優れている。④沖縄本島には見られない宮古・八重山の伝承を伝えている。⑤沖縄にかぎらず日本全土にも稀な栗国島独自の伝承が見られる、という五点にまとめているが、なかでも注目すべきなのは、優れた語り手が多く、その語りに破綻が少ないことだろう。これは一九八〇年代の調査としては稀有なことである。調査に応じた語り手は男性二十七人・女性四十三人の計七十人だが、全員が大正生まれまでで、昭和生まれは一人もいない。しかも明治生まれの話者が五十二人で、圧倒的に多い。

現在、沖縄伝承話データベースには、当時の調査で記録された話のうち六七九話が収められているが、その四五八話がしまくとぅば（栗国方言）の語りである。これは、今では考えられない数であり、一村の語り記録としては、一九七〇年代以降の沖縄民話記録としても「他の追従を許さない記録」ではないだろうか。しかも、そのほとんどが、破綻のない完結した語りなのである。

これは四〇年以上にわたる遠藤庄治の沖縄調査のうちでも稀な経験であったと推測される。

5. 読谷村史編集室の民話情報発信

5-1. 沖縄国際大学口承研と読谷ゆうがおの会の共同調査

栗国村の「栗国アーカイブ」が沖縄国際大学学生であった島元八重子の卒業論文資料調査にはじまった口承研の独自の活動に基づくものであるのに対し、読谷村史編集室のホームページの民話関連資料の蓄積は、一九七六年九月の遠藤庄治による講演をきっかけに村民たちが立ち上げた＜読谷ゆうがおの会（民話の会）＞と国際大学口承研の共同調査の成果である。

遠藤の講演直後の十月十四日には、読谷村教育委員会の山内源徳、読谷村歴史民俗資料館の名嘉真宜勝をはじめとする四十四名を会員として＜読谷ゆうがおの会＞が結成され、その後ただちに開始された口承研との合同調査は、翌一九七七年夏の終わりまでに村内の全地域（二十二字）をくまなく巡り、実に三千五百十六話を記録するに至った。

この調査は、初めは公民館などに話者を集めた予備調査的な性格があったが、その後にくつろいだ雰囲気なかで、共通語の語りを地元のくしまくとうばで聞きなおしたり、録音状態の良くない語りを語りなおしてもらおう等の丁寧な補足調査を続けた。そして調査と並行して語りの文字おこし作業（翻字）が行われ、その成果を各字ごと編集して、一九八四年から二〇〇三年までに十五巻の資料集が刊行された。沖縄の各地には栗国村の『栗国島の民話』をはじめ、地域の語りを収録した優れた民話集は少なくないが、一村の行政組織（教育委員会等）が字ごとの語りをもれなく記録して十五巻もの資料集を刊行した例は、読谷村のほかには見られないし全国的にも稀有な例であると思う。

5-2. 読谷村史編集室ホームページの試み

「読谷村史編集室ホームページ」は、戦時記録、戦跡マップ、発行物の紹介と購入などのサイトがリンクされているが、くむんがたい（物語り）くわらべうたくしまくとうば単語帳・マップくいろいろ資料館などの地域の言葉と口頭伝承に関する情報発信が中心で、栗国村の「栗国アーカイブス」に見られるような地域の暮らし（民俗）を発信して地域を訪れる人々（観光者）に情報を提供し来訪を促すく観光民俗学的な志向は希薄である。

しかし、村の口頭伝承に的が絞られているために、サイトを訪れた人は、図2に用意されたく地域から探すのページで村の二十二字の語りにたやすくアクセスすることができる。

例えばく伊良皆のタグをクリックすると伊波蒲戸さん（1894年生）のく勝連バーマーを聞くことができる（図3）。

この図3の下部のブルーの4つのアイコンのうち一番左をクリックすると音声と翻字された方言の文字情報が流れ、二番目のアイコンをクリックすると図4のように、語りをアニメ化した映像が音声とともに共通語のテロップが流れる。

こうした各字の民話に関する行き届いたサービスは、現在のところ六十話に留まっているが、見事なくしまくとうば（地域の言葉）で語られた語りの資料の公開としては、これもおそらく前例がないのではないだろうか。

ほかにもホームページ・トップ（図1）のくいろいろ資料館のアイコンをクリックすると、前述のく読谷村民話資料集・全十五巻のすべてのPDFと、児童向けのくしまくとうば絵本三冊が閲覧・ダウンロード可能である。

こうした「読谷村史編集室ホームページ」の試みは、「栗国アーカイブス」と同じく一括交付金を活用したものだが、現在も進行中であり、く読谷村立歴史民俗資料館から生まれたく世界遺産座喜味城跡・ユンタンザミュージアムとの活動とともに、沖縄各地に蓄積された民話資料の活用のモデルとなるプロジェクトではないだろうか。



まとめ

ここまで一九七〇年代以降の沖縄民話記録の歩みとその成果を遠藤庄治の業績とともに述べてきたが、今後その成果をいかに継承し、いかに活用すべきかには、多くの課題が残されている。ここで全ての課題を整理し、先に進むには紙数が不足なので、その成果継承と活用の一手段であるデジタル・データベース化の現状について考えてみたい。

すでに述べたように、沖縄民話の一九七〇年代以降の音声記録は七万六千六十三件が確認済みで、うち五万八千七百二十五件はエクセルによるデジタル化を終えている。このデジタル記録のプラットフォーム（データ入力形式）は沖縄伝承話資料センターが作成したものだが、現在、あるいは将来の民話記録の管理者のすべてに開放されているし、このプラットフォームを研究者個人や公共組織が利用し、個別の改良や修正を加えることには、まったく自由である。

大切なことは、現在あるいは将来にわたる沖縄民話記録のデータベースを、いかなる個人または組織にも、いかなる公共活動にも、活用しやすく使いやすい状態に仕上げることである。

この「共同利用民話データベース」構築の具体的な課題は三つある。

一つは、1970年代以降の音声調査記録のうち存在が確認されていながらデータベースの共同利用が難しかった糸満、佐敷、豊見城の調査データの共同利用作業を推進することである。（そして、これは大変難しい課題だが、次の目標として、データベースに奄美地域の民話記録を加えて、「琉球弧民話データベース」を作製することも視野に入れなければならない。）

二つ目は、エクセルによって整理されたデータを、適切なソフトウェアを選定し、誰もが使いやすいデータベースに仕上げることである。

二〇一九年一〇月までの沖縄伝承話データベースは、収録話数が四万五千話程度と限られていたが、作成担当者・岩倉千春の努力でオープンソースとされ、研究者中心に無償で自由に提供されてきた。しかしその岩倉の急逝とともに、データベース作成ソフト（ファイルメーカー）にも不具合が発生し、共同利用可能なデータベース作成は中断したままである。

その間、音声記録のエクセル整理は七万六千六十三話にまで到達しており、ファイルメーカーに替わるデータベース作成ソフトを選定し、新しい共同利用データベースの作成することが焦眉の課題となっている。

三つ目は、現在、県立美術館博物館、粟国アーカブス、読谷村史編纂室等が公開し、名護博物館が準備しているようなデジタルによる資料活用を推進することである。現在進行中のデジタル技術の進化と情報発信手段の多様化を考えれば、近い将来にデジタルを利用した＜沖縄民話ミュージアム＞を沖縄の各地に複数構築することは、さほど難しいことではないだろう。

沖縄各地の行政組織が所有するサーバー内のサイバー空間の片隅に、汎用的な技術を利用して、地域独自の＜民話・民俗ミュージアム＞や＜暮らし博物館＞、＜観光情報館＞、＜デジタル道の駅＞などを立ち上げる。あるいは学校や図書館・公民館のサーバーに仮想現実を利用して＜沖縄民話資料室＞や＜語りの部屋＞を設置すれば、それほど大きな費用

を費やせずに小さなく沖縄民話ミュージアム>がサイバー空間にいくつも誕生すると考えるが、いかがだろうか。

参考文献

1. 遠藤庄治編『栗国島の民話』（1992年 栗国村教育委員会）
2. 岩瀬博・遠藤庄治・福田晃編『沖縄の民話』（1980年 日本放送出版協会）
3. 遠藤庄治著『沖縄の民話研究』（2010年 NPO 法人沖縄伝承話資料センター）
4. 『読谷村民話資料集・全十五巻』（1984-2003 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館）

※2022年7月23日（土）沖縄民俗学会にて発表